

川上先生と魯迅

松尾正路

中国の歴史も現実もまったく知らず、魯迅についても、近代文学の育たない政治国家の作家、いわゆる社会派の思想作家という先入観を持っていたので関心がなかった。自分には縁のない作家だと思いこんでいた。川上先生が「魯迅研究」を出版された当時（1962年）、私は「阿Q正伝」しか読んでいなかった。この作品が魯迅の全貌を語るものでないことは後でわかったが、作品を知らないまま研究論文だけ読むのは、研究者の研究態度や分析論理の跡を追ってゆくだけで、研究の母体である作者と作品のイメージは実質のない稀薄な観念像として浮かぶにすぎない。作品を通して作家の魂に触れることがないからである。とくに魯迅のように、人と作品の関係が誠実な魂の苦悶につながり、一言にして詩人と定義することができるような作家の場合はとくにそうである。私が少しばかり、しかも翻訳を通して魯迅の作品に触れたのは偶然のきっかけだった。もちろん、川上先生と「魯迅研究」のことが記憶にあったからだが、ある日、たまたま「世界の文学」の「魯迅」を開いて目次を追っていると、「ノラは家出してからどうしたか」という文芸講演の題目があったので、おどろいた。1923年、北京女子高等師範学校文芸会での講演である。ここで私と魯迅を比較するおそれた考えなど毛頭ないことは断るまでもないが、札幌の女子大学で頼まれた私の「文学概論」の最初のテーマが「家出をしたノラはその後どうなったか」だったからである。こんな偶然の一致に好奇心をそそられて魯迅の雑文（短文）を読んでいくうちに私の魯迅観はがらりと変ってしまった。次ぎ次ぎに意外な魯迅が現われた。一人の作家をこんなふうに新しく発見してゆくおどろきはめったに経験したことがなかった。

暗く絶望的で、しかも暖かく、リアリストとしての鋭い分析、聡明な洞察力

と同時に、詩魂の源泉を劇的に内包した否定と肯定、絶望と希望の峻烈なる体現者、ヒューマニスト魯迅を語るのは容易なことではあるまい。

魯迅は、「復讐（その二）」と題した短文に、聖書マタイ伝によるキリストの最後の叫び——わが神、わが神、なんぞ我を見棄てたまいしや——を引用し、「神は彼（キリスト）を見棄てた。彼は結局「人の子」に過ぎなかった。かくてイスラエル人は、「人の子」さえも磔殺したのだ。「人の子」を磔殺した人々の身体は、「神の子」を磔殺した者よりもっと血ぬられて、血腥い。」と結んでいる。中国の社会事情をつぶさに知らなくても、ヒューマニスト魯迅の絶望と憤りの深さは、この緊迫した短文のなかに、魯迅自身の痛烈な痛みとなって滲み出ている。アンドレ・ジイドも「田園交響楽」の最後に同じ引用をしているが、キリストの絶望解釈については両者の間に質的な相違がある。魯迅の場合は現実との絶ちがたいかわりが感じられ、ジイドの場合は現実の愛を契機として神の愛そのものに向けられている。もし共通なものがあるとするれば、人間の真の真実、現実においても神においても見棄てられるのではないか、ということだろう。

「希望」にいたっては、魯迅の内的なドラマを一層深くしている。

「絶望の虚妄なること、まさしく希望に相同じ。」

これはハンガリーの愛国詩人ペトフィ・サンドルの詩句だが、むしろ魯迅自身の傷痕を剔出したものと考えたい。

希望とは何か？ それは娼婦。

誰にでも媚を売り、一切をみつがせ、

幾多の宝石——君の青春——を犠牲にした

とき、彼女は君を棄てるのだ。

私はペトフィという詩人のことは何も知らないが、この詩句を読んだとき、これがボードレールの散文詩だといっても見当はずれではないと思った。しかし魯迅は書いている。「いまは星はなく、月光も笑いの渺茫も愛の乱舞もない。

青年たちはいたって安らかで、そして私の面前にも真の暗夜はないのだ。」と。

魯迅は断じてデカダンスの詩人とはなり得ず、おのれの暗夜に埋没することもできず、彼の明敏な知性をもってしてもフランスふうの冷厳な人間定義のモラリストにはなれなかった人のようだ。文学の無力を説きながら、文学とよばれる言葉の世界以外には究極的な自己表現の手段を持たなかったように見える魯迅だが、といて、文学芸術の牙城にたてこもることができなかった魯迅である。この同時的な内部矛盾の根源は何だろう？ 魯迅の誠実だと思う。それは、ついに人間から、中国の民衆から、目をそむけることのできなかつたヒューマニスト魯迅の誠実である。

川上先生は共産主義国家の教条主義的な政治統制に肩入れしたことはなかった。四人組当時の中国をすでに厳しく批判嘲笑しておられた。このことがただちに魯迅の影響だなどというのではないが、魯迅こそ硬直した思想の独善や空しい約束の偽善を、そして何よりもそういう思想の暴力を憎悪した人だと思う。川上先生はよく、あんな国では文学は育たない、と言われた。先生が文学という言葉を用いるのが私には異様に感じられたこともあったが、魯迅研究者としての先生を思えば当然な言葉である。先生の直情的な発言や爆発的な怒りを風変わりな性癖のように受けとった人もあったかとおもうが、先生は、理性の美名に隠れた怯懦な妥協や自己保身の偽善を鋭く見抜き、そのことが癪に障り、がまんができなかつたのだ。世俗の迎合社会では感度の高すぎる先生の誠実だと思う。これが先生固有の気質だとしても、魯迅の魅力にひきつけられた人の偽らざる一面の姿である。先生のように、自己が自己であるために損をする人こそ教師の名にふさわしいのに、そんな教師がほとんどいなくなってしまった。しかも、古風な義理固さを身につけている先生は、どこか魯迅の「藤野先生」を思わせるものがある。再び緑丘には現われることのない貴重な精神である。

付記。私の魯迅観は「野草」、「彷徨」、「故事新編」など、高橋和己の翻訳で勝手気ままに、よく言えば、直感的な印象を自分の内面の尺度に合わせて書い

たものにすぎない。川上先生は苦笑されるだろうが、魯迅に対する私の深い尊敬と愛情に免じて御寛恕ください。